

中国文芸研究会 2012 年度総会議案書

中国文芸研究会は、年に二回、二月と八月に研究誌『野草』、年十一回『会報』を刊行し、年十回例会を開催している。さらに夏期合宿を企画し、有志による「映画の会」や「書評の会」も運営されている。科研と連動した 40 年代文学の研究会も立ち上がっている。このように、近年、研究会の活動が活発になり多彩になったことは事実である。

一方、常態化するマンパワーの不足は、にわかには改善する見込みはない。会員数は一時期右肩上がりだったが、近年では、ほぼ横ばい状態が続いている。これは、本研究会だけではなく、学界全体の新陳代謝が思うように進んでいないこととも関わる。会員も年々忙しくなる一方で、様々な分野で数値化された目に見える成果が求められるようになった。

こうした状況のもと、学会組織とは異なる民間の研究団体が、会費と純粋な意欲だけに頼って活動を維持してゆくには、これまで以上に実質的な事務局体制の整備と、学会や研究機関での活動とは一定程度差別化された、独自の研究活動の提案が求められるだろう。とは言っても、実際に行うべきは、腰をじっくり据えた、成果を問うことばかりに汲々とし、息の長い、着実な研究活動である。

研究活動を支える会費は、管理の宜しきを得て会員から滞りなく納入されている。

また、研究活動の活性化については、以下に記すようにそれぞれのセクションにおいて工夫がはかられ、実践されている。今後は、それらを『野草』や『会報』の紙面に反映させ、課題を広く会員と共有しながら、試行錯誤を重ねてゆくことが大切であろう。

I. 2011 年度活動報告

*会員数は 249 名（2012 年 4 月現在）。前年度より微増である。

*運営面では、事務局の役割分担がほぼ定着し、円滑な研究会活動が行われた。今後は事務局体制を維持・更新してゆく人材の確保・育成が大切になるだろう。

*以下、各セクションごとに活動状況を報告する。

(1) 『野草』刊行（担当：宇野木・阿部）

*第 88 号（2011 年 8 月 1 日刊行／編集担当：宇野木洋／版下担当：平坂仁志）および第 89 号（2012 年 2 月 1 日刊行／編集担当：阿部範之／版下担当：平坂仁志）を予定通り刊行することができた。

*88・89 号についても、これまで通り例会・合宿で報告・討論の後に『野草』に投稿という基本方向は継続されたが、報告に基づく論考以外の投稿も少なくなかった。

*昨年度の総会議案の記述通り、『野草』編集に関わる中長期的な計画に基づき編集担当者が決められ、編集・刊行が順次進められた。

*「『野草』編集の手引き」の改訂や『野草』の投稿規定の整備は今後の課題である。

(2) 『会報』発行（担当：永井・三須）

* 2011年度は、永井英美をリーダー、三須祐介をサブリーダーとして活動し、2011年4月号(354号)羽田朝子/5月号(355号)三須祐介/6月号(356号)田村容子/7月号(357号)津守陽/8月号(358号)豊田周子/9月号(359号)上原かおり/10月号(360号)和田知久/11月号(361号)河本美紀/12月号(362号)永井英美/2012年1月号(363号)大野陽介/2月3月合併号(364+365号)中野徹がそれぞれ編集を担当した。

*各月とも期日どおり順調に出すことができた。

*印刷費の関係もあって設定された「ひと月あたり12頁を限度とする」という原則は守られた。

*編集担当者がPDFを作成しメールマガジン版を配信した。

*遠方等の事情でやむを得ない場合をのぞき、会報担当者が会報発送にも立ち会い、執筆者分の送付などに気を配り、編集から発送までの過程の責任をもつという形で担当号に対する責任を果たした。

*「交流」欄の編集については、事務局員が情報を随時事務局MLに挙げ、それが主な情報源となった。

*「例会記録」は、基本的に報告者によるレポートを掲載した。

*『会報』メールマガジン版登録者は、現在のべ102人である。

*会報印刷費はあらかじめリーダーにあずけられ、木村桂文社からの請求に応じてその都度支払い、年度末に会計との間で清算をおこなった。

*昨年4月の総会におけるご意見などを受けて、例会のない2月発行の会報を3月号との合併号とし、ページ数も増やして小特集を組む、という試みを初めて行った。

*この合併号発行についての経緯の説明や特集の内容、今後の会報担当者の活動などについての相談のために、6月例会の日の午前中に臨時に「会報担当者懇談会」を行った。その際、紙面活性化などを目的として「会報への反響」のコーナーを設けることなどを決定した。

*次年度の会報担当者の活動について相談するために、1月例会日の午前中にも「会報担当者懇談会」を行った。その際、以下のようなことを話し合っており、取り決めたり、また従来のやり方を確認したりした。その内容をもとに本総会議事録の「活動報告」「活動方針」を作成している。

- ①「会報についての反響」のコーナーは概ね好評なので、来年度も継続する。
- ② 木村桂文社側の希望もあって、今後は同社に版下を入稿する際、電子メールによりデジタル版下データ(PDF形式)を送付する。
- ③ 会報原稿は原則として著者校正は行わず、完成原稿で渡して欲しい旨、毎号の原稿募集の広告に書き加える。
- ④ 会報担当者用のMLを作る。担当者は版下が完成したら、木村桂文社に送る前にひとまずこのMLに挙げ、各担当者が目をとおり、気づいたことがあれば指摘する。(木村桂文社送付の何日前、というような規定は設けない。1日前でも2日前でも可。なるべく

ミスが減らすための一方法という位置づけである。)ほかに担当者が相談したいことがあればこのMLを気軽に活用する。

⑤ ①～④の決定事項も含めた会報作成マニュアルの改訂版(従来のものは永井が2004年に作成した仮版)を大野が作成する。(マニュアルはすでに完成し各担当者に送られている。)

⑥ 2012年度の2月3月合併号(2013年3月末発行)は三須が編集を担当する。

⑦ 2月3月合併号の担当者の決定や特集の内容、毎号の会報の編集についての意見やアイデアほか、

日頃感じていること、次年度の担当月などについて話し合うために、来年度も1月例会開催日の午前中に、「会報担当者懇談会」を設ける。

⑧ 3年後に巡ってくる会報400期では記念号を発行すべく準備してゆく。来年度の「会報担当者懇談会」ではそれについてもう少し具体的に話を進める。

⑨ 会報担当者や他の事務局員に関心をもってもらうために、永井は、木村桂文社から請求書が届いたら金額を事務局MLにあげる。

その他、交流データベースの今後の活用のしかたや、出席できなかった担当者がML上で上げた意見などについて話し合った。

(3)「例会」開催(担当:濱田)

例年通り、年間10回の「例会」を開催した。通常の研究発表の他、4月例会で李建志氏(関西学院大学社会学部教授)の講演「「琉大文学」を読む——「神話」として扱われる学生同人誌」を聞き、12月例会ではアジア遊学146『民国期美術へのまなざし』の書評を行った。月によってばらつきがあったが、平均して約20名の会員・非会員が集まった。最終的に報告者は確保できたが、学期中はなかなか報告希望者が見つからないようである。ただ今年度については「例会報告→『野草』掲載→例会での合評」という流れは原則保たれていたように思う。

(4)「夏期合宿」(担当:大東)

*夏期合宿(担当:大東和重)は、8月29日～31日の3日間にわたり、福井県坂井市の三国温泉にて、現地の田村容子氏のご協力を得て実施した。参加者は29名。近年合宿では特集を組んでおり、本年度の特集は「馬華＝マレーシア華語文学・文化研究の現在」であった。人文書院刊行の翻訳シリーズ「台湾熱帯文学」の書評、関連する発表、台湾馬華文学の作家・張貴興氏を招いての座談会と、密度の高いプログラムであった(最終日は例年通り自由発表)。黄英哲氏のご尽力で、台湾から張貴興氏、馬華文学研究者・高嘉謙氏(台湾大学)にご参加いただけたことは画期的であった。2日目は中国語で進行するという試みもなされ、充実した三日間となった。

(5)「書評の会」(担当:松浦)

*松浦恆雄(責任者)・今泉秀人・西村正男が中心となって、4月・6月・10月の例会前の午前中に開催した。毎回担当者が報告したあと、出席者による意見交換を行ったが、著者

が参加され活発な議論が行われた月もあった。新刊書・論文などの情報交換もフリートークで行った。参加者は多くなかったが、最新の研究成果に触れる活性化の効果は十分にあった。

*他の研究活動とのリンクの仕方や『会報』への反映のさせ方などを引き続き検討した。

(6) 「映画の会」 (担当：菅原)

*2011年度は、2012年1月に第1回映画の会を開催し、文芸研会員でもある川田耕氏の近著『愛の映画：香港からの贈りもの』の書評、および最近の中国映画研究の動向について意見を交換した。

*2010年度に休会状態を脱したものの、今年度は再び定期的な開催には至らなかった。「映画の会」開催日程や会の方向性については、引き続き今後検討すべき課題として残された。

*しかしながら、同報メールを利用した映画関連情報のやりとりは活発に行われ、亀井文夫の『北京』(1938年)の神戸での上映や、「アンダーグラウンドの後で—中国ニューインディペンデント映画の現在」等の映画イベントの情報等がいち早くメンバーに連絡された。

*映画の会メンバーが編集担当を務めた『野草』第89号には、会の参加者3名の論考が掲載された。

(7) 40年代文学“漂泊”研究会 (担当：今泉)

*文科省科学研究費補助を受け、2008年から中国文芸研究会の活動の一部として始めた40年代文学“漂泊”研究会は、2010年度末に第一次の科研費プロジェクトを終了した。日中戦争と国共内戦を背景とするこの時代の中華圏の諸地域における文学的営為、それらを規定し支える文学の場としての制度、人間関係を対象として、その時代的特徴を1940年代の「地域」・「メディア」・「制度」という三テーマにおいて、多元的な視点から複数の「関係性」として捉え直そうという目標を、この3年間に一定程度達成できたと思われる。(詳しい研究成果は、<http://kaken.nii.ac.jp/ja/p/20520327>に公開されている)

(8) 「特別事業」計画 (担当：宇野木)

*「特別事業」のあり方をめぐる議論は始まりつつあるが、具体的な活動は行なえなかった。

(9) 「野草ネットワーク」 (担当：青野)

*レンタルサーバーによる研究会のネットワーク運営が定着した。

URL=<http://c-bungei.jp/bungei.shtml>

E-mail=office[アットマーク]c-bungei.jp

*ウェブサイトは、菅原慶乃が中心となって管理・更新作業を行ない、充実した内容となっているが、ウェブサイトの重要性に比例して、担当者の負担が重くなってきている。

*事務局アドレス office[アットマーク]c-bungei.jp 宛のメールを事務局 ML に転送する作業は、2011年度より菅原・鳥谷の複数担当制へと移行した。これにより、転送処理の相互チェックがはたらき、転送ミスや対応漏れ等を防ぐことが可能となった。

- * 「野草 ML」(登録数のべ 81 件)は会員交流の場として、「事務局 ML」(登録数のべ 61 件)は運営に関わる意見交換や実務作業効率化の手段として重要な役割を果たしてきた。「野草 ML」は依然あまり活発ではないが、気軽な情報交換の場として、一定の活用がなされた。一部のメールアドレスにメールが配信されないトラブルは、若干改善された。
- * 『会報』メールマガジン(登録のべ 102 件)は、会員数に比して依然登録数が少ない。さらに登録を呼びかけることと、アーカイブ化の検討とが必要であると思われる。
- * 「交流データベース」を設置したが、『会報』の交流欄との連携がうまくいっていない。工夫が必要である。

II. 2012 年度活動方針

- * 事務局体制をしっかりと安定させ、研究活動の維持・向上に努める。
- * そのため、(1) 組織の維持管理を受け持つ会費管理・口座管理・事務局 ML、(2) 研究活動の発表や広報を受け持つ例会・会場予約・二次会予約・夏合宿・『野草』・『会報』・ウェブサイト、(3) 新しい研究活動の企画を受け持つ「書評の会」・「映画の会」・「40 年代文学“漂泊”研究会」・特別事業の三本柱ががっちり組み上がり、本研究会が十分に力を発揮できるよう、事務局・各セクションの役割分担を確認し、相互の連携を強めてゆきたい。
- * 大学院生を中心とする若手層および関西在住以外の会員にも、主体的、積極的な参加と役割分担を呼びかけるとともに、広く会員からの積極的な提言や取り組みを歓迎したい。
- * 研究活動の活性化には、例会報告や『野草』掲載論文などにおける研究水準の向上が不可欠であるが、そのためにも、これまで以上に多様な方法が試みられて良いだろう。以下、各セクションごとの活動方針を記す。

1 各種研究活動について

(1) 『野草』刊行(文責:松浦)

- * 『野草』の刊行は、研究会の中心事業である。刊行を継続することはもちろん、掲載論文の質を向上させたい。そのため、「例会報告→『野草』掲載→例会の合評会」という基本原則を守り、それぞれに充実させることを研究会活動の骨子とする。
- * 編集担当者は、従来通り、執筆予定者との連絡を密にし、さらに今後は例会担当者との連携もはかってゆく必要がある。
- * 編集担当者は「『野草』編集の手引き」を活用し、締切りを厳守することにより、投稿原稿の審査(査読)や版下作成を含む全ての編集作業が円滑に進むように努める。
- * 「『野草』編集の手引き」は、現状を踏まえて改訂する必要がある。
- * 今年度も『野草』編集に関わる中長期的な計画に基づき、編集担当者を決め、十分な余裕を持って編集作業が行えるよう努めなければならない。
- * 今後の刊行計画は以下の通りである。
- ・第 90 号=2012 年 3 月末原稿提出〆切、2012 年 8 月 1 日刊行。編集:黄英哲・星名宏修

・第91号=2012年9月末原稿提出〆切、2013年2月1日刊行。編集：高橋俊〔サポート大東和重〕

・第92号=2013年3月末原稿提出〆切、2013年8月1日刊行。編集：中野徹

・第93号=2013年9月末原稿提出〆切、2014年2月1日刊行。編集：城山拓也

・第94号=2014年3月末原稿提出〆切、2014年8月1日刊行。編集：田村容子〔サポート藤野直子〕

・第95号=2014年9月末原稿提出〆切、2015年2月1日刊行。編集：小笠原淳〔サポート濱田麻矢〕

*『野草』の書店への卸作業、海外送付先への発送作業、及びバックナンバーの管理は好並品の担当とする。

(2) 『会報』発行（担当：永井・三須）

*編集担当体制は、永井英美をリーダー、三須祐介をサブリーダーとする。

*昨年度同様、紙媒体版とメールマガジン版の2本立てで発行し、例会の前に発送作業を行う。「例会」開催日程との関係から、昨年度同様、2月号は3月末に2月号・3月号合併号として発送する。

*誌面は12頁までとする。原稿の依頼・採否等は各月編集者の裁量で行なうが、各月編集者が必要と考えた場合は、リーダー・サブリーダーに相談し、最終的には事務局の判断に委ねることもできる。なお、3月末発行の合併号については、24頁までとする。

*今年度の2月・3月合併号は三須が編集を担当し、通常の記事のほか、特集を企画する。特集についての詳細の発表と原稿の募集は12月号、1月号の会報で行う予定である。

*1月例会の午前中に「会報担当者懇談会」をもち、会報担当者が集まって、編集上の問題点、次年度の特集、今後の会報のあり方、現行の「会報作成マニュアル」の使い勝手などについて、アイデアや意見を出し合う。その席での決定はその日午後の1月例会で報告し、事務局全体にメーリングリストで報告するとともに、その決定内容をもとに次年度の総会議案書「会報」の「活動報告」「活動方針」を書く。

*会報印刷費はあらかじめリーダーにあずけ、年度末に会計との間で清算をおこなう。

*編集担当は、基本的に担当者の希望に基づいて以下のようにする。

2012年4月号（366号）3月末原稿〆切・4月上旬編集作業・4月末発送=井上薫

5月号（367号）4月末原稿〆切・5月上旬編集作業・5月末発送=佐原陽子

6月号（368号）5月末原稿〆切・6月上旬編集作業・6月末発送=島由子

7月号（369号）6月末原稿〆切・7月上旬編集作業・7月末発送=津守陽

8月号（370号）7月末原稿〆切・8月上旬編集作業・合宿会場で発送=大野陽介

9月号（371号）8月末原稿〆切・9月上旬編集作業・9月末発送=和田知久

10月号（372号）9月末原稿〆切・10月上旬編集作業・10月末発送=田村容子

11月号（373号）10月末原稿〆切・11月上旬編集作業・11月末発送=上原かおり

12月号（374号）11月末原稿〆切・12月上旬編集作業・12月末発送=小笠原淳

2013年1月号(375号) 12月末原稿〆切・1月上旬編集作業・1月末発送＝羽田朝子
2月3月合併号(376+377号) 2月末原稿〆切・3月上旬編集作業・3月末発送＝三須祐介

4月号(378号) 3月末原稿〆切・4月上旬編集作業・4月末発送＝河本美紀

5月号(379号) 4月末原稿〆切・5月上旬編集作業・5月末発送＝豊田周子

*担当者は原則として編集から発送までの責任を負うこととし、担当月の会報を発送するときには立会い、執筆者分の封入、残部処理の確認などを行う。(急用などで立ち会えない場合は、京都会場は永井、大阪会場は大野がその代理をする。)

*引き続き内容の充実・活性化を図り、「交流」欄を充実させる。全国の会員にも「野草ML」などを活用して研究情報をお寄せいただきたい。

*「交流」情報は、「事務局ML」「野草ML」に寄せられた情報を、城山拓也がストックし、毎月のはじめに会報担当者に回すと同時に、「交流」データベースに登録する。

*「例会」記録は原則として「例会」報告者が執筆する。ただし4月例会(講演)はその限りにあらず、あらかじめ記録者を決めておくことが望ましい。

*印刷費削減のため、画像は原則として版下データに埋め込む。

*海外研究機関・研究者への贈呈および海外留学生への配送サービスのあり方については、引き続き検討する。会報はPDF化されているので、海外研究機関に贈呈している会報の郵送を停止、メール配信に切換えることを、時期、通知方法なども含めて事務局で検討する。海外発送担当は好並晶とする。

*メールマガジンの運営は青野繁治が行い、PDFファイルの作成と配信は原則として各月の編集担当者が行う。

*投稿者は原稿送稿の際、原則としてE-mail添付(原稿ファイルと印刷イメージPDF)または電子メディア入稿(原稿ファイルを保存した電子メディア、外字部分を明記したプリントアウトを同封すること)とする。画像については、データを添付して配置位置を指示する。送られた原稿の返却は原則行なわないが、特別の事情があつて返却を希望する場合は、その旨を申し出て、あて先を明記し切手を貼付した返信用封筒を同封すること。

【原稿送付先】

・Eメール office[アットマーク]c-bungei.jp 「中国文芸研究会会報」原稿であることを明記する。

(〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東 8-1-1

大阪大学箕面キャンパス青野研究室気付 中国文芸研究会事務局宛)

*昨年度1月の「会報担当者懇談会」の席上で、「会報は台湾の中央研究院中国文哲研究所や上海図書館の雑誌コーナーなどにも置かれている世界的なメディアである」という話が出た。会報担当者は、十数名の担当者で分担して仕事をする、という点が、ほかの事務局の係りとは異なっている。各地に散らばりそれぞれ多忙な各担当が、話し合ったり、共通認識をもったりすることは容易ではないが、1月例会日の午前中に行う「会報担当者懇談

会」での話し合いほか、随時意見交換を行って、今年度も係りとしての責任を果たしてゆきたい。

(3) 「例会」開催 (担当：濱田)

*「例会」開催数は、年間10回とする(2月、8月は例会を行わない)。月の最終日曜日午後1:30より開会することを原則とする。12月は忘年会を兼ねるため、日時は別途定める。

*講演(会員外・他領域・外国人研究者などを含む)・書評を年間各1回程度、『野草』関連報告を数回組み入れる。『野草』合評会(9・3月例会)の討論内容は、次号の『野草』誌上の合評記に反映する。論文執筆者は合評会に出席することを原則とする。

*「例会」担当は濱田麻矢(office[アットマーク]c-bungei.jp)とし、例会の企画と報告希望者の調整を行なう。調整の必要から、希望者は早めに申し込むことを望みたい。コメンテーターについては報告者の申し出があれば検討する。

*会場は、偶数月は同志社大学(京都会場)、奇数月は関西学院大学大阪梅田キャンパス(大阪会場)とする。ただし、状況に応じて会場は変更になる可能性があるため、研究会のウェブサイトをチェックされたい。会場予約は阿部範之(同志社大学)・西村正男(関西学院大学)、二次会会場予約は京都=鳥谷まゆみ、大阪=大野陽介が担当する。

*すでに決定している「例会」内容(【例会カレンダー】)は以下の通り。六月、七月の報告者決定が急がれる。

4月29日(京都) 講演 梶谷懐(神戸大学大学院経済学研究科)
「現代中国の経済社会と「公共性」」

5月27日(大阪) 呂慧君 内山完造の中国における受容
森平崇文「報人」鄭正秋一五四時期を中心に

6月24日(京都) 賀桂梅
劉艶

7月29日(大阪) 裴亮
津守

8月 不開催

9月30日(大阪) 『野草』90号合評

10月28日(京都) 未定

11月25日(大阪) 未定

12月 (京都) 書評(未定)

1月27日(大阪) 未定

2月 不開催

3月31日(大阪) 『野草』91号合評

(4) 「夏期合宿」(担当：大東)

*「夏期合宿」は、集中的な研究・交流の場として極めて重要である。今年度も大東和重を担当者とする。

*9月2日～4日(2泊3日)に行う予定。詳細は「会報」および「ウェブサイト」掲載予定の案内を参照のこと。

(5)「書評の会」(担当：松浦)

*今年度も、偶数月(京都会場)の例会前(午前10時半頃開始)に開催する。研究活動への反映の仕方についてはさらに検討を続けてゆく。具体的な書評対象については、会報またはウェブサイトで確認していただきたい。

(6)「映画の会」(担当：菅原)

*今年度においても、東アジア映画研究関連書籍やイベント等の話題に目をむけつつ、映画の会の活動を、『野草』をはじめとする文芸研の諸活動に有機的に結びつけていけるよう、模索する。開催スケジュールについても、引き続き検討していく。

*「映画の会」は映画研究に興味をもつ会員有志の集まりであり、すべての会員に開かれている。同報メールに参加を希望される場合は、菅原会員までご一報願いたい(メールアドレス：yoshino24[アットマーク]nifty.com)。また過去の開催内容については、文芸研ウェブサイト参照されたい。

(7) 40年代文学“漂泊”研究会(担当：濱田)

*“漂泊”研究会は2011年末から新たな科研費プロジェクト(研究代表者：濱田麻矢、基盤研究(B)23320073「漂泊する叙事 1940年代中華圏における文化接触史」)に採択された。1940年代という流亡と離散の時代を、文化接触史の立場からとらえ直すことを目標とし、規模を拡大した活動を始めている。今年度も引き続き、本研究会のテーマに関わる研究報告を文芸研例会で行うほかに、40年代テキストの翻訳検討会を数度開く予定である。また、十一月に40年代をテーマにしたシンポジウムを開催する予定。

(8)「特別事業」計画(担当：宇野木)

*会員からの企画を募集する。積極的な提起を期待したい。

*本研究会編『図説・中国20世紀文学』(白帝社、1995年初版・98年再版)は、在庫切れが続いている。原典を講読しつつ現代文学史を学ぶことができる教材は他に類を見ないこともあり、改訂版ないし新版の刊行の声も寄せられている。出版社との交渉を再開し、企画化を進める。

(9)「野草ネットワーク」(担当：青野・菅原)

*コンピュータ・ネットワークを利用した『会報』『野草』編集作業の効率化は定着した。コンピュータ・ネットワークは事務の効率化に留まらず、遠隔地との交流や種々の情報提供・発信手段として、不可欠のものである。レンタルサーバーによる運営も定着したので、新たな展開が期待される。担当は青野繁治・菅原慶乃とする。

*『野草』掲載論文の検索を始め、本研究会に関する様々な情報を発信している「中国文芸研究会ウェブサイト」(<http://c-bungei.jp/bungei.shtml>)を、さらに充実させていく。

*設置された「交流データベース」と事務局MLの連携がうまくゆくように工夫する。

*「野草 ML」(加入手続=事務局までメールでアドレスを知らせること。手続が完了す

ると担当者からそのアドレスに通知がなされる)を活用した会員間の交流にも期待したい。論文・著書などを発表した際には、その情報の提供を是非ともお願いしたい。

*事務局アドレス宛のメールを事務局MLに転送する作業は、前年度に引き続き、菅原・鳥谷の複数担当制で行う。

2 運営体制について

*研究会の運営は、事務局と『野草』編集委員会によって行う。

(1) 事務局

*事務局は、総会決定に基づき研究会活動の日常的な実務を担当する。事務局構成メンバーと担当は以下の通り。

青野繁治 (ML サーバ管理、メルマガ)・阿部範之 (京都会場予約)・井上薫 (会報)・今泉秀人 (普通口座)・上原かおり (会報)・宇野木洋 (特別事業)・小笠原淳 (会報、『野草』95号編集担当)・大東和重 (夏期合宿)・大野陽介 (メール便大阪、会報、大阪会場二次会予約)・河本美紀 (会報)・北岡正子 (『野草』編集常任)・絹川浩敏 (『野草』編集常任)・工藤貴正 (『野草』編集常任)・黄英哲 (海外交流、『野草』90号編集担当)・斎藤敏康 (『野草』編集常任)・佐原陽子 (会報)・城山拓也 (『野草』93号編集担当)・菅原慶乃 (映画の会、ウェブサイト管理)・高橋俊 (『野草』91号編集担当)・谷行博 (『野草』編集常任)・田村容子 (会報、『野草』95号編集担当)・津守陽 (会報)・鳥谷まゆみ (京都二次会場予約、外部メールのML転送)・豊田周子 (会報)・永井英美 (会報編集リーダー、メール便京都)・中野徹 (会報、『野草』92号編集担当)・西村正男 (『野草』編集常任、会場予約)・羽田朝子 (会報)・濱田麻矢 (例会)・平坂仁志 (版下)・福家道信 (『野草』編集常任)・藤野真子 (会費、名簿管理、振替口座)・星名宏修 (『野草』90号編集担当)・松浦恆雄 (書評の会、事務局長)・三須祐介 (会報サブリーダー)・弓削俊洋 (『野草』編集常任)・好並晶 (海外、書店)・和田知久 (会報)。

*事務局の住所は以下の通り。

〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東 8-1-1

大阪大学箕面キャンパス 青野研究室気付

(2) 『野草』編集委員会

*『野草』編集委員会は、常任委員 (『野草』編集担当経験者など)、編集担当、及び編集担当が事務局構成員を中心とする会員から選出した編集委員若干名により構成される。

*『野草』編集委員会は、『野草』の編集と刊行に責任を持ち、投稿論文の査読を手配する。また「原稿審査 (査読)」のあり方、『野草』の編集・投稿規程の策定などを含む中・長期的な課題について検討する。

*『野草』編集委員会は、編集担当が必要に応じ事務局と相談し招集する。

(3) 会計監査

*財政の健全な執行を図るべく会計監査を置く。会計監査は岡田英樹とする。